

「ゲネサレ湖の岸辺から」

ルカの福音書 5:1~11

はじめに

聖書に記された御言葉にはすべて意味があります。一見何の変哲もないただの状況説明のような記述にも、神はそれを隠しておられます。今日もそのような隠された事実、神の秘密、奥義を読み解いてまいります。聖霊の助けがありますように。

1. 押し迫る

ルカの福音書【新改訳 2017】

5:1 さて、群衆が神のことばを聞こうとしてイエスに押し迫って来たとき、イエスはゲネサレ湖の岸辺に立って、

今日の箇所は、イエシュアが「ゲネサレ湖」というガリラヤ地方にある湖（ガリラヤ湖とも呼ばれる）にいられた時の出来事です。このゲネサレ(גֶּנֶסַר)という名は、ヘブル語で表記すると「懲らしめる」という意味のヤーサル(יָסַר)と「園、庭園、果樹園」という意味のガン(גַּן)という二つの言葉からなる名であることが分かります。神である主はご自分の民であるイスラエルを、今日においても聖書に記されたその歴史の中でもぶどうやいちじくなどの果実を豊かに与え、祝福しておられますが、その一方、度々懲らしめてもこられました。それは彼らが何度も何度も主に逆らい、その教えを捨てて偶像の神々を拝み、これに仕えたからです。そのような時、主は異邦人の国々をイスラエルを憎む敵として送り、彼らを懲らしめると語っておられます。

レビ記【新改訳 2017】

26:14 しかし、もし、あなたがたがわたしに聞き従わず、これらすべての命令を行わないなら、
26:15 また、わたしの掟を拒み、あなたがた自身がわたしの定めを嫌って退け、わたしのすべての命令を行わず、わたしの契約を破るなら、
26:17 わたしはあなたがたに敵対してわたしの顔を向ける。あなたがたは自分の敵に打ち負かされ、あなたがたを憎む者があなたがたを踏みつける。あなたがたを追う者がいないのに、あなたがたは逃げる。
26:18 もし、これらのことが起こっても、あなたがたがなおわたしに聞かないなら、わたしはさらに、あなたがたの罪に対して七倍重く懲らしめる。

この御言葉に伴う出来事がイスラエルの歴史において、そして今日に至るまで絶えず起こり続けています。そしてこのゲネサレ湖の岸辺でイエシュアのみもとに「群衆が…押し迫って来た」ともありますが、ここに使われているヘブル語ダーハク(דָּחַק)は本来、「敵からの圧迫、攻撃、迫害（士師記 2:18）」を意味する言葉なのです。つまりここに記された、一見ただの状況説明と思える記述には、異邦人の国々を用いてイスラエルを懲らしめられる神のご計画が表されているのです。そしてその究極は、世の終わりに現れる獣、反キリストが国々を率いてイスラエルを攻め立て、これを根絶やしにしようとすることを表しています。しかし「懲らしめる」ことは、滅ぼし、消し去ることとは違います。親が子を叱るように、子が反省

すれば赦されるのです。イスラエルを赦し、その窮地から救うために来られる御方がイエシュアです。その御業がどのようなものであるかが次に示されています。

2. 二艘の小舟

ルカの福音書【新改訳 2017】

5:2 岸辺に小舟が二艘あるのをご覧になった。漁師たちは舟から降りて網を洗っていた。

ここに描かれている二艘の「小舟」、ヘブル語のオニツヤー(הַיָּאֲוֹנִים)は「私」という意味のアニー(אֲנִי)と、そして「主」の御名であるヤー(יְהוָה)が組み合わさり、「主とは私、私は主である」という意味の言葉とも捉えることができます。つまりこの「小舟」は天から漕ぎ出された、送り出された主イエシュアを表しているのです。そしてそれが「二艘ある」とは、イエシュアは二度来られるという事実を表しており、イエシュアの初臨と、そして再臨によってイスラエルを救う神の御業、ご計画が成し遂げられることがここには表されているのです。そしてそれがどのような結果をもたらすのかが「漁師たちは…網を洗っていた」という記述に表されています。ここに使われている「洗う」という意味のカーヴァス(קָוַס)ははじめ、以下のように用いられました。

創世記【新改訳 2017】

49:10 王権はユダを離れず、王笏はその足の間を離れない。ついには彼がシロに来て、諸国の民は彼に従う。

49:11 彼は自分のろばをぶどうの木に、雌ろばの子を良いぶどうの木につなぐ。彼は自分の衣をぶどう酒で、衣服をぶどうの汁で洗う。

これはアブラハムの子イサクの子ヤコブ、すなわちイスラエルが息子のユダに預言したものです。初臨のイエシュアはこのユダの子孫、ダビデの子孫としてお生まれになりましたのでこの預言は神の国の「王権」を手にした、王の王、主の主としてのイエシュアを指し示したものです。「衣服をぶどうの汁で洗う」という箇所に聖書で最初のカーヴァスがありますが、直訳では「衣服をぶどうの血で洗う」となります。救い、救われるためには、大前提としてその人が神に対して犯したすべての罪が赦される必要があります。それを果たすのは、ほふられた子羊としてのイエシュアの血です。イエシュアは十字架の上でその血を流され、流し尽くされ、その御業を成し遂げられました。この事実を聖書では「その衣を洗い、子羊の血で白くした(黙示録 7:14)」と表現されます。つまり「漁師たちは…網を洗っていた」というこの描写には、イエシュアの十字架の血によって罪を赦されたすべての人が表されているのです。ちなみに、この時代に使用されていた漁業用の投網は、亜麻糸で作られていたそうです。子羊の血で白くした衣は、メシアの花嫁と呼ばれる私たち教会に与えられる「輝きよい亜麻布(黙示録 19:8)」と同義です。

3. イエシュアの教え

ルカの福音書【新改訳 2017】

5:3 イエスはそのうちの一つ、シモンの舟に乗り、陸から少し漕ぎ出すようにお頼みになった。そして腰を下ろし、舟から群衆を教え始められた。

イエシュアは「舟に乗り」「漕ぎ出」し、そして「腰を下ろし」「教え始められた」とあります。しかし語られたその内容は一切記されていません。なぜならイエシュアのなされたこれらの行為を示す言葉にそれが集約されているからです。

① 乗る

「乗る」と訳されていますが、正確には舟の上に「降りる」という意味でヤーラド(רָדַד)という言葉が使われています。この言葉は本来、「神が人のところに天から降りて来られる (創世記 11:5)」という意味の言葉です。イエシュアは天から降りて来られた神の御子であり、やがて再び降りて来られます。

② 漕ぎ出す

「渡る」という意味のアーヴアル(אָוַל)が使われています。この最初の言及は以下の箇所です。

創世記【新改訳 2017】

8:1 神は、ノアと、彼とともに箱舟の中にいた、すべての獣およびすべての家畜を覚えておられた。神は地の上に風を吹き渡らせた。すると水は引き始めた。

8:2 大水の源と天の水門が閉ざされ、天からの大雨がとどめられた。

かつてこの地上のすべての生命を滅ぼし尽くした、通称ノアの大洪水。しかし神はご自分が「覚えて」お選びになったノアとその箱舟に乗ったすべてのものたちのために、地上に風をアーヴアル「吹き渡らせ」、これを退けられました。再臨のイエシュアの目的はご自分の選びの民であるイスラエルを救い、彼らのために地上の滅びを終わらせることにあります。

③ 腰を下ろす

ここに使われているヤーシャヴ(יָשָׁב)は本来、「地に住む (創世記 4:16)」という意味の言葉です。再臨のイエシュアは初臨の時とは異なり、天に帰って行かれることはありません。この地上に、人とともにヤーシャヴ、住まわれるのです。

④ 教える

「教える、学ぶ」という意味のラーマド(לָמַד)は、本来このようなことを目的としたものでした。

申命記【新改訳 2017】

4:1 今、イスラエルよ、私が教える掟と定めを聞き、それらを行いなさい。それはあなたがたが生き、あなたがたの父祖の神、【主】があなたがたに与えようとしておられる地に入り、それを所有するためである。

このように、ラーマド「教える」とは本来、イスラエルの民が「生き」イスラエルの「神、【主】が…与えようとしておられる地に入り、それを所有する」ことを目的とした言葉であるということです。イエシュ

アが語られた、教えられたその内容とは、これら「乗る」「漕ぎ出す」「腰を下ろす」「教える」という意味のヘブル語の中に示された神のご計画についてであったということです。

4. 深みに漕ぎ出し

ルカの福音書【新改訳 2017】

5:4 話が終わるとシモンに言われた。「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい。」

5:5 すると、シモンが答えた。「先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした。でも、おことばですので、網を下ろしてみましよう。」

5:6 そして、そのとおりにすると、おびたしい数の魚が入り、網が破れそうになった。

5:7 そこで別の舟にいた仲間の者たちに、助けに来てくれるよう合図した。彼らがやって来て、魚を二艘の舟いっぱい引き上げたところ、両方とも沈みそうになった。

「深み」はエーメク(קמק)といい、本来は「谷、谷間」を意味する言葉です。この最初の言及を見てみましょう。

創世記【新改訳 2017】

14:1 さて、シナルの王アムラフェル、エラサルの王アルヨク、エラムの王ケドルラオメル、ゴイムの王ティディアルの時代のことである。

14:2 これらの王たちは、ソドムの王ベラ、ゴモラの王ビルシャ、アダマの王シンアブ、ツェボイムの王シエムエベル、ベラすなわちツォアルの王と戦った。

14:3 この五人の王たちは、シディムの谷、すなわち塩の海に結集した。

14:8 そこで、ソドムの王、ゴモラの王、アダマの王、ツェボイムの王、ベラすなわちツォアルの王は出て来て、シディムの谷で戦う備えをし…

14:10 シディムの谷には瀝青の穴が多くあり、ソドムの王とゴモラの王は逃げたとき、その穴に落ちた。

たくさんの方が記されていて混乱してしましますが、まとめると、「シナル…」をはじめとする国々と「ソドム…」をはじめとする国々との戦が記されています。「ソドム…」の国々は「シディムの谷…塩の海」に集まり、そこに陣を構えたとあり、ここに聖書で最初のエーメクが使われています。一般的な戦における「谷」に集まり、陣を敷くことの愚かさ、その不利な状況をご理解いただけるでしょうか。航空機のない時代の戦争は、見晴らしの良い高い場所に陣を敷いた方が、戦うにしても逃げるにしても圧倒的に有利なのです。にもかかわらず「ソドム…」の国々は愚かなことにエーメク「谷」を選んでしまいました。案の定、彼らは戦に敗れ、さらにそこにあった「穴に落ちた」ともあり、さらに深みにはまり、みじめな最期を遂げています。ここは今日「死海」と呼ばれる、地上で最も低い（海拔マイナス 430m）地の底と呼ばれるような場所で、まさに一匹の魚も捕れない、そもそも魚自体いない、その名にふさわしい「死、滅び」を指し示すような場所です。つまり「深み」エーメクとは本来、「死、滅び」を意味する言葉なのです。その「深み」を指してイエシュアは「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい」と言われました。「漕ぎ出し」は先ほど述べたアーヴァドで、神はご自分がお選びになった民のために滅びを過ぎ去らせる、終わらせるという意味を持った言葉ですから、この「深みに漕ぎ出し」とは、私たち人が困難を顧

みず進んで行って何かを成し遂げることを説いたものなどではなく、神が、イエシュアがご自分の民を滅びの淵、穴、まさに谷底、どん底エーメクから救い出されること、死からいのち、滅びから救い、という復活の御業を表した御言葉なのです。

そして「網を下ろして魚を捕りなさい」という言葉が指し示す事実も同様です。この「網」のことをミフモレット(מִּמְרֹת)といい「(胸が) 熱くなる」という意味のカーマル(קָמַר)を語源とする言葉です。それは長い間離れ離れになっていた家族がついに再会する時の感動、感激を表す言葉であり(創世記 43:30)。イエシュアはご自分の民であるイスラエルを愛し、彼らに対するその熱い思いを胸に、天から下りて来られ、みもとに集められる、それが「網を下ろして魚を捕りなさい」という御言葉に秘められた神のご計画なのです。

以前の私はこの「深みに漕ぎ出し、網を下ろして魚を捕りなさい」という御言葉を自分自身に課し、伝道に励んでいました。家々を訪ね、祈りながら町を歩き、御言葉の書かれたちらしを配って回り、路上で賛美の歌を歌い、福音を叫びました。しかしそれは全くと言っていいほどに結果が出ませんでした。それはまさに「先生。私たちは夜通し働きましたが、何一つ捕れませんでした」という状況でした。もちろんそれがすべて無駄なことであったとは思いません。もしかすると私の知らないところで実を結んでいるのかもしれません。しかし確かなことは私の目がそれを見ていない、確認できていないということです。なにより「おびたしい数の魚が入り、網が破れそうになった」という状況には程遠いものであったのです。ですから今私は、この御言葉を自分にではなく、やがて来られるイエシュアに置きます。初臨と再臨という「二艘の舟」によって「おびたしい数の」人々がイエシュアのみもとに引き上げられ、集められ、救い出されるという神のご計画に、その成就にこそ希望を置き、これを待ち望みます。

5. 離れてください

ルカの福音書【新改訳 2017】

5:8 これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して言った。「主よ、私から離れてください。私は罪深い人間ですから。」

5:9 彼も、一緒にいた者たちもみな、自分たちが捕った魚のことで驚いたのであった。

5:10 シモンの仲間の、ゼバダイの子ヤコブやヨハネも同じであった。イエスはシモンに言われた。「恐れることはない。今から後、あなたは人間を捕るようになるのです。」

5:11 彼らは舟を陸に着けると、すべてを捨ててイエスに従った。

シモン・ペテロはイエシュアに向かって「離れてください」と言いました。もちろんそれは文字通りの意味で彼は言ったのだと思います。しかしこの記述に使われているヤーツァー(יָצָא)は本来、「離れる」という意味ではなく、地の上に生きる、栄えるという意味を持った言葉なのです。

創世記【新改訳 2017】

1:12 地は植物を、すなわち、種のできる草を種類ごとに、また種の入った実を結ぶ木を種類ごとに生じさせた。神はそれを良しと見られた。

イエシュアは私たちから、地上から離れ去って行かれる御方ではありません。やがて再び地上に来られ、住まわれ、そしてこの地上にいのちの王国、永遠のいのち樂園としての御国「神の国」を構築、まさにヤーツァー「生じさせ」る御方なのです。シモン・ペテロの言葉はその事実を指し示す預言的なものであったと言えます。

6. 人間を捕る

イエシュアはシモンに「人間を捕るようになる」と言われました。そしてそれは彼の「仲間の、ゼバダイの子ヤコブやヨハネも同じであった」とあることから、彼らにも言われた御言葉であると言えます。ここには「神の国」におけるその構成員、イエシュアに仕え、聞き従って働く者たちの存在が表されています。それは「シモン・ペテロ」、「ヤコブやヨハネ」の名に表されています。シモンという名はヘブル語名ですがペテロはギリシャ語名すなわち異邦人の名です。つまりこの名はイスラエルと異邦人が組み合わさることを表した名なのです。そしてヤコブはアブラハムの子イサクの子イスラエルの本来の名で、ヨハネの語源ハーナン(יְהוֹנָן)はそのイスラエルの妻子、奴隷たち(創世記 33:5)、すなわち神の恵みによってイスラエルにつながった者たちを指し示す言葉です。このようにシモン・ペテロも、そしてヤコブとヨハネという名もそのどちらかがイスラエルとそれにつながる異邦人の存在を指し示しているのです。

ではそれらの存在が「人間を捕るようになる」とはどういう意味でしょうか。ヘブル語でこの「捕る(人)」のことをツァイド(ציד)と言います。

創世記【新改訳 2017】

10:8 クシュはニムロデを生んだ。ニムロデは地上で最初の勇士となった。

10:9 彼は【主】の前に力ある狩人であった。それゆえ、「【主】の前に力ある狩人ニムロデのように」と言われるようになった。

ここで「狩人」と訳されているのが聖書で最初のツァイドです。それは「【主】の前に力ある」者であったとあります。ここに記されている「地上で最初の」ツァイドとなった「ニムロデ」は神に逆らい、敵対しました。しかし最後のツァイドとも言うべき「神の国」におけるイスラエルとそれにつながる異邦人は、神の御声、イエシュアの御言葉に聞き従う「【主】の前に力ある狩人」となります。それは今日の箇所だけでも五回も記された「シモン(יְשׁוּעַ)」という名に表されています。この名はシャーマ(שָׁמַר)というヘブル語を由来とする名で、その本来の意味は「神の御声を聞く (創世記 3:8)」という言葉です。このように、「人間を捕るようになる」とは、イエシュアが地上に再臨され、そして統治される「神の国」において「主の御声に聞き従う、主の前に力ある地上の勇士」と呼ばれる存在となるという意味なのです。そしてそれはまさに「すべてを捨ててイエスに従」う者であると言えるでしょう。私たち異邦人の教会は、イスラエルにつながり、「神の国」において主イエシュアの御前に、そのような存在として立てられるのです。

人はみな優秀になりたい、強くなりたいと願います。ですから人は努力し、勉強し、自分を鍛えるのです。しかしその私たちの欲求、願いを完全に満たすことができるのは、私たちを選び、お造りになった、いや造り変えてくださる神だけです。そしてそれは「神の国」においてのみ実現可能となります。そしてそれは年老いて朽ち果てる、終わることがありません。永遠に満たされ続けるのです。信じましょう、アーメン！待ち望みましょう。御国が来ますように。主イエシュアよ来てくださいと。